



逢魔が時



川崎ゆきお

西久保は、その夕方、逢魔が時の変を期待しつつ散歩に出た。暇なのだろう。

逢魔が時とは昼と夜の境目、ここに別の何かが入り込む時間帯だ。幕間のどさくさで稼働するものがあるのだろうか。これが完全に暗くなると、もうそのややこしい時は過ぎる。次は丑三つ時だ。そのため逢魔が時から丑三つ時までは暇だ。ということは、ここは安全地帯なのだ。

そんなことを考えながら、西日を背に、出来るだけいかがわしそうな場所へと向かった。

ただ、よくある郊外の住宅地なので、あまりそれに適したものはない。逢魔が時なら場所を問わず怪現象が起こるとは限らない。やはり背景が必要だろう。

逢魔が時、その道を通ってはならない。というような噂もあるが、それはかなり前のことで、村はずれの寂しい場所にありそうな、そんな小道もしっかり舗装され、周囲は住宅地になっている。

昔、そういう村はずれの小道に鬼火が出たとかもあるが、この鬼火も竹林などが背景にないと映えないだろう。

だから、西久保は背景がないと逢魔が時の変も起こらないと思っている。ただ、そんな証拠はなく、積み重ねたデータもない。ただの感想だ。

さて、進む方向を探していると、古い農家が少しだけ残っている通りを思い出した。農家の中に入っていくわけにはいかないが、土塀などが残っている。その狭い路地を通り抜けようと考えた。西久保の近場では、ここが一番背景として近い。

そして、西日も落ち、陽射しが消えた。影がなくなったのだ。

しかし、まだまだ明るい。これでは雰囲気としては今一つ。

早い目に農家の路地に来てしまったのだ。空を見ると、まだ昼間だ。日は沈んでいるが、雲はまだ日に当たっている。

それが消えるまで、ここで待つわけにはいかない。それこそ不審者が潜伏しているようなものだ。

「あなたもですか」

と、西久保は声をかけられた。それは同類の匂いがした。

似たような服装だ。

「ここがきっとワープポイントなんですよ。君もそれを確かめに来たのでしょ。僕は古地図を見て、この位置を特定しました。ここが怪しいのです。直径二メートルほどの結界があるはずですよ。まだそこまで特定できていませんがね」

「いや、僕は逢魔が時系でして」

「そりゃもう、同じようなものですよ」

「と、いうと」

「その二メートルほどの結界を通過したんでしょう。踏んだのです。ワープできないで、そのまま行きすぎたのですが、一瞬妙な穴に入ったはずですよ。それが逢魔が時の正体ですよ」

「く、詳しいですねえ」

「僕の場合、その結界の中央部からワープを試みようと思っています」

「ああ」

「しかし、駄目です。ここではないのかもしれませんが」

「そうなんだ」

「じゃ、失敬」

西久保は、その男を見送った。すたすたと歩き去って行く。

そして、西久保も、その路地を抜け、広い通りに出た。先ほどより明らかに空も町も暗くなっている。

「待てよ」

と、西久保は腕組みした。

「今のが逢魔かも……」

了